

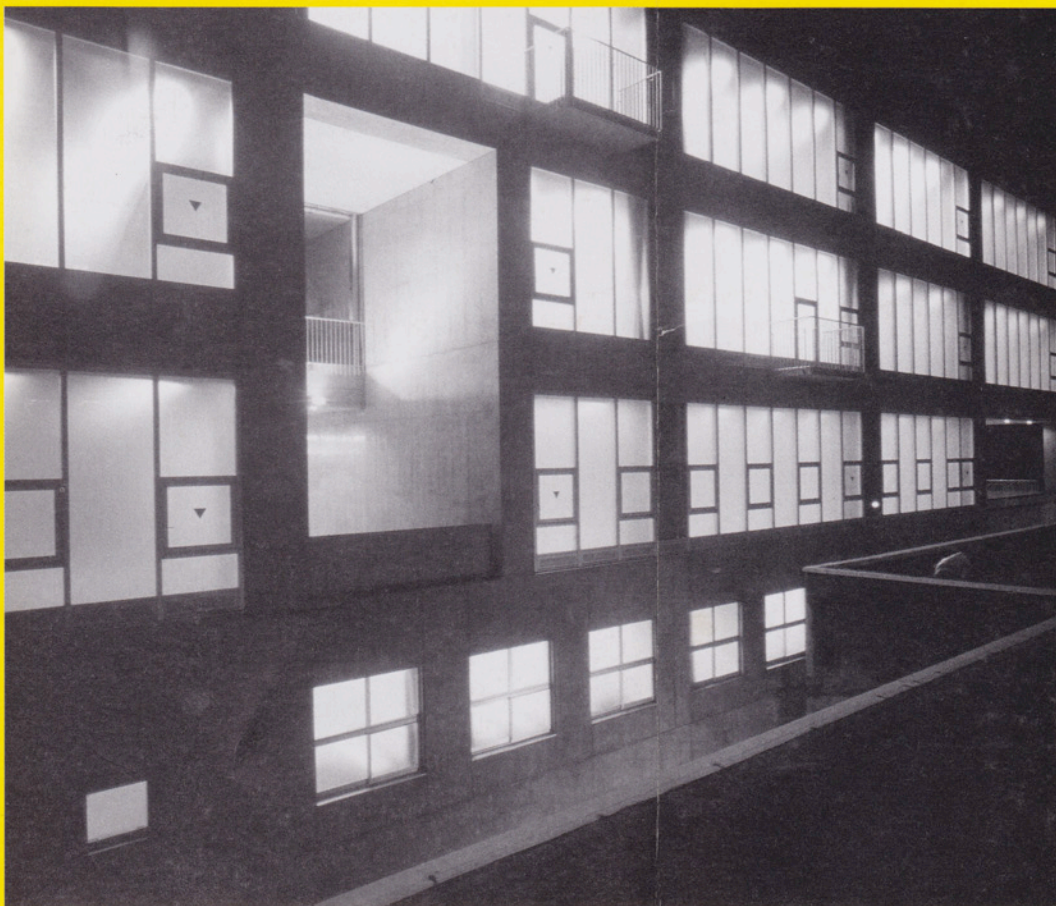
武蔵野美術大学建築学科・日月会

Forma-Foro

フォルマ・フォロ

Dec.1. 2007

vol.8 第8号



目次

インタビュー /
武蔵美と私：
過去・現在・未来
宮下 勇

卒業生の素顔 /
出会い／建築／
アスブルンド
吉村 行雄

製図室 /
TDU + MAU
ワークショップ
高橋スタジオ 市堰 祐輔

TOPICS /
日月会総会・建築祭
2006-2007
森 大樹

表紙写真：
武蔵野美術大学 2号館
設計：宮下勇
(写真提供：小倉康正)

武蔵美と私：過去、現在、未来

宮下 勇 MIYASHITA, Isamu
武蔵野美術大学教授

我々の先輩である宮下先生が今年から主任教授になられて、武蔵美の建築学科もひとまわりしたという感があります。今回はぜひいろんなお話をお聴きしたいと思います。

宮下：僕は山梨県の富士吉田で育って、高校までそこにいました。大学受験では僕は2浪して、その間に地元の吉田高校で女子バスケット部のコーチをしたりしていました。2年間頑張って、強いチームになりました。男子の方も割と強いチームでした。僕は選手としてはダメだったんだけど、コーチとしてはわりと上手くいったかな・・・(笑) そういうことが好きだったんです。

そして2浪して、武蔵美に入りました。まあ当初は芸大を目指していたんですが、もともと建築学科に決められていたのですか？

宮下：僕は絵が書きたいと最初は思っていたのだけど、祖父が「建築なら少しは食えるぞ」というものだから・・・(笑)。でも工学系の頭じゃないし、美術系の建築という芸大とここしかなかったわけです。それで武蔵美に入学したわけですが、美術的な環境で絵を書いたりしながら建築を学びたいという気持ちでした。最初は建築の何たるやということは漠



研究室にて
(写真提供：青山恭之)

然としかイメージできていませんでしたが、クラスメートのみんなはとても勉強している人が多かった。例えば当時みんなが「コル」って言っていて、初めてコルビュジエという人のことを知った。これはまずいなと思って、勉強するようになりました。僕らのときは産業デザイン学科の建築デザイン専攻ということでしたが、商業デザインや芸能デザインなどの他の専攻と一緒にでした。1年生のときはみんな一緒にクラスで勉強したんですが、もちろん他の専攻のひとたちはみんなデッサンがうまくて、ある種のカルチャーショックを受けましたね。その時共通絵画の助手をやっていたのが、今学長である甲田先生です。やっぱり当時デッサンで再提出するのは建築学科が多かったね(笑)。だけど楽しかったです。キャンパスは、入った当時はまだ4号館までしか出来ていなかったです。4年生になって7号館が出来て、1階の東側に建築学科が入ったんです。それまでは僕は1回生はプレファブの校舎で勉強していました。入学当初はプレファブの校舎がずらっと建っていて、「これが大学かな？」って思ったね(笑)。クラスメートは勉強している人が多くて、知識を持っていて、刺激的でした。僕はあまり勉強していなかったんで、これではいけないなと思って、3年生ぐらいの頃はアアルトの図面集を一生懸命トレースしたりして勉強しました。3年生のときに、国際学生コンペ(UIA)があって、この時にまず学内でコンペして2チームが選ばれ、そのなかで僕もメンバーとして参加しました。

その制作を通して、建築の設計って面白いなと思いました。集団での制作も楽しかった。結果的に我々の案は佳作に選ばれました。自分も含めきっとみんなも自信というか、達成感を持ったと思います。

指導された先生はどなたでしたか？どんな内容の建物でしたか？

宮下：寺田先生や竹山先生や、先生みんなで口を出していましたね(笑)。内容は漁村の計画でした。こんな地形の場所です(雑誌を

見せていただく)当時の校内誌で、先生方がそれぞれ寄稿しています。これがジュリー(講評会)の写真です。竹山先生、寺田先生、第一工房の高橋先生もいますね・・・。当時はジュリーのときはみんなきちんとした服装をしていました(笑)。

今と全然違いますね！(笑)

宮下：芦原先生は、ハーバードを卒業されていたし、プレゼンテーションのマナーみたいなものも含めて教えられました。僕らがそれにどの程度応えられたのかはわからないけれど・・・。僕らは一回生で、先輩もいないし、先生方も試行錯誤でした。とりあえず何をやったかという、課題が終わる毎に皆で焼き肉パーティーをするんです。今は学内では火は使えないですが、当時は4号館の下とか、7号館の裏とかで炉を炊いて、みんなで買い物とか焼き係とか役割分担をして、先生方もみんな来てくれた。また、当時は芦原先生のご自宅に学生を全員招待してくれたこともあります。僕はそこでサウナとかハンバーガーとかに初めて出会ったわけです(笑) そんな体験から、建築に対する興味が日本だけじゃなく、外へ向いていきました。例えばサウナからフィンランド、ハンバーガーからアメリカの空気を感じたわけです。日常的に図面を書いたりすることは皆やってましたが、それ以外にコンペとか、先生方のお宅とか、パーティーとか、そんなところからも大事な教育を受けていたと思います。それが一番記憶に残っているかな。4年生では、僕は寺田先生のゼミに入りました。当時ゼミを持っていたのは、芦原先生、寺田先生、竹山先生、織本先生、磯崎先生、保坂先生、岩渕先生でした。

卒業制作はどんな作品をつくられましたか？

宮下：「機音の聴こえる街」というタイトルでした。当時ヘニング・ラーセンの建築を見て、とてもいいと思った。それにかなり影響されていたんです。「国際建築」に載っていたと思いますが、竹山先生の名前もクレジットされていました。日本に帰ってこられる前



「武蔵野美術大学2号館」木工工房内観 設計：宮下勇
(写真提供：青山恭之)

に、ラーセンのところで一緒にプロジェクトをやっていたんですね。

作品自体は特定の敷地は設定しないプロジェクトでしたが、富士吉田というところは織物の緞子などの生産が盛んで、外を歩くと日常的な機音が聞こえるような場所でしたので、そんなイメージを元に自分なりに制作したのです。卒業制作のときに考えたことは、今でもやはり、それを切磋琢磨しながら、うまくいかないかなと繰り返し考えていることです。平面図にしても立面図にしても、単純にして、あまり複雑な形にしないといったこと。僕が常に考えているのはこのことと、あともうひとつあります。偶然性といいますか、図面で決めないで現場で決めるということ。僕はこういうやり方も設計だと思っています。例を出すと、函館で映画館を設計した時ですが、タイルの色と形をどっちにしようかというときに、タイルを放って決めたり、あるいはスチールのテープが自然に形作った曲線をデザインに取り入れられたりといったことです。こういう手法も卒業制作のときに既に考えていました。ここから始まった考えを、今も自分が徐々に具現化していつているんだと思います。大学時代は、いい仲間が沢山いたし、本当に楽しかった。

1回生はすごい人たちがたくさんいたとよく

言われますね。

宮下：僕らにはそういった自覚はなかったですけどね。先輩もいないわけですし。でも後にみんなリーダーシップをとれる人物になっていったということは、優秀な人が多かったんですね。1回生は35名くらいいて、いつも学校に来ていたのは半分くらいでした。いまま同じですが、学校にいつもいる人と、外でいろいろやっている人と分かれていた。また、建築学科だけでなく、他のデザイン専攻の人たちもいたので、彼らからの刺激も多かったです。今でもそれは自分の中に残っている。現在武蔵美では一年生が造形総合といって、3週間の他の学科の授業を、自由に選択して履修できるという教育をしています。僕はそれがもう一歩進んで、一年生は皆一緒に学ぶといったことでもいいと思っている。現在は学生人数も今は多いので、どこまでやるかということは考えないといけなけれど。いろんな学科の人たちとの交流は学生たちに残るし、学科を超えた友人もできるでしょう。そしてどんどん外へ向かって行くということは、いいと思う。

卒業後、就職なさった経緯は？

宮下：まず就職しようと思って、鈴木侑さんのところに行きましたが、海外に行かれていて対応できないとのことでした。そうしたら

寺田先生が第一工房を受けてみてはと言われて、受けたんですけど、48時間ぶつとおしの試験でね・・・美術館の設計を48時間後に持って来なさいということでした。手伝ってもらってもよいし、手段は自由ということで。それは結局だめでした。そうしたら、寺田先生が「君、竹山先生のところへ行くか」とおっしゃったのですが、当時は竹山先生はゼミの担当でなかったし、あまりよく知らなかったのです。今でもよく憶えています。竹山先生に呼ばれて、図書館の前に原っぱみたいなところがあったんですが、そこでコーラを飲みながら、「君、僕のところへ来るかい？」とおっしゃって・・・それで「行ってみよう」と思ったんです。そこがスタートでした。卒業前からもう研究所には出入りしていて、確か事務所で徹夜したまま卒業式に出たように記憶しています(笑)。僕が入ったときは5人ぐらい所員がいました。当時は住宅の仕事をやっていました。僕は入ってすぐに「一番館」の現場に行きました。こっちもまだわからないから、右往左往してね・・・現場でいろいろ聞かれてもわからない。そのときは大変でしたが、今ではそれはいい教育だったと思っています。そこから続けて現場としては一番館、二番館と担当しました。それが終わったころ北海道の仕事が来ました。岩倉組本社から始まって、ペプシコーラ工場、ホテルパリエートムなどをやりました。ホテルが終わるまではほとんど北海道に通い、頻繁に行ったり来たりしていました。それが一段落する



「武蔵野美術大学2号館」設計：宮下勇
(写真提供：青山恭之)

と、今度は竹山研究所が北海道に「アトリエ・インディゴ」を設立することになって、僕は東京じゃないところがいいなと思っていたので、それを機会に札幌に住むようになりました。竹山研究所では、東京に5年、札幌に6年いたことになります。僕自身は今やっている仕事をひとつひとつ仕上げていくことに精一杯で、大きな建築のうねりを常に把握していたわけではありませんが、竹山先生がやっていたことと自分が建築の動きそのものであったのだと思います。建築って何だろう？という問いかけに対するある種の答えを、僕は竹山研究所で得たと思います。竹山先生の持っている、日本に留まらない世界の言語というか、世界の共通語としての建築といったものを学びました。僕はそんなに多く世界を旅したわけではないですが、竹山先生を通じて世界を感じていたのだと思います。函館の映画館は、独立されてからの作品ですか？

宮下：そうですね、独立というか、11年いましたから、竹山事務所から卒業しようということで、自分でやってみよう。独立とはいっても、札幌で、最初は本当に何にも仕事がないんです。結婚はしていましたが、ふたりだけでしたから、まあなんとかなるだろうと思っていた。アパートの押入を改造して、そこをアトリエにしてね（笑）。そこで電話を待っている訳です。ある日とうとう電話がかかってきた。知人が僕が独立したばかりだと紹介してくれた方でした。何はともあれ嬉しかったし、とにかく一生懸命やりました。初めに入金があった通帳は、まだとってあります（笑）。初めて自分の仕事をしたときの嬉しさ、これは年月を経てもずっと持続しなきゃいけないなと思っています。「アトリエ・インディゴ」の後に、東京に戻ってくるという選択肢もあったのでは？

宮下：確かにそうですが、札幌のほうがいい仕事はやりやすかったです。僕は札幌に友人が何人かあったし、同級生の倉本君もいました。彼は早いうちから独りでやり始めていまし



「武蔵野美術大学ガラス工房」 設計：宮下勇
(写真提供：宮下勇)

た。当時はまだ設計事務所というのが認知されていなくて、設計事務所にお金を払うという考え方があまり定着していなかった。よほど有名な建築家は別ですが。しかし当時は、若い建築家も含めて、建築をやる仲間がどんどん集まって来ました。ちゃんとみんなでやっていたこうと、「札幌建築塾」の活動を始めたのです。地方都市はみんなそうかもしれないですが、すぐ仲間たちが集まれるでしょう。しょっちゅう集まって情報交換できるわけです。そういう中でアルヴァ・アアルト展も札幌に招致することになりました。この間は竹山実展などもありましたが、「展覧会を催す」というと地場の下地が出来ていて、パッと動けるといふ利点があります。そういう仲間たちとはしょっちゅう集まって楽しい交流ができる。地方都市にはそういう場がありますが、そういった所から新しい芽が出てくるだろうと思っています。

北海道という土地の力もあるのでしょうか。

宮下：そうですね。北海道は新しい大地だという魅力を感じました。NHKの番組で「北の建物拝見」というのがあり、僕と倉本さんと円山さんが出て、それぞれ自分の好きな建物をピックアップして紹介するのがありました。やはり北の大地に対するある既成のイメージがあり、僕はそれを打破したかった。いろんな人がいていろんな生活をしているということを紹介したかったのです。ほかの日本の場所では街の歴史は1000年以上遡る



「武蔵野美術大学1号館B (共通彫塑棟)」 設計：宮下勇
(写真提供：宮下勇)

こともありますが、北海道の都市は100年ちょっと前からの歴史で、住み始めたのはおじいさんの代からとか、過去が手に取るように見える明らかなさというのがある。北海道という大地で自分がやれそうだという感触がありました。

永住も考えられたのですか？

宮下：そうですね。僕は全く動くつもりもなかったし、東京に戻るということは考えていなかったです。ある日突然武蔵美から電話が来るまではね（笑）。

一本の電話で人生が変わったわけですね（笑）

宮下：僕の人生のなかでは、15年が一周期という感じがありますね。妻とふたりだけだから、いつでも自由に動けるといふこともありました。

久しぶりに帰って来て、変わったと思われた点はどんなことでしたか？

宮下：まず建物がたくさん増えていることにびっくりしましたね。僕らのころは4号館、7号館が建って図書館が建設中という頃で、まだのどかな砂塵の舞う野原でしたから。学生数も増えましたね。

自分たちが学生だった頃に比べて、学生が幼いという印象はありますか。

宮下：いや、そういう感じはないですね。ここにきたからには、対等というか、共に学ぶ人たちという感覚です。たまたま僕らは建築のある部分については彼らより何百倍か多く知っているかもしれないが、逆に彼らのほう

日月会総会・建築祭 2006-2007

森 大樹 MORI, Hiroki

26 回生 大樹建築・造形研究所 (日月会事務局長)

建築祭 2006-2007 が、2007 年 3 月 1 日から 4 日、新宿のサテライトにて行われました。会期中の 3 日には日月会総会、各賞の授賞式、レビュー、懇親会が集中し、多くの会員が現役の学生たちとの交流を深めました。

日月会の総会では、昨年度事業報告、決算報告がなされ、次年度活動計画、予算計画等、承認されました。各賞のうち、日月会に直接関係するものの結果は以下の通りでした。受賞者の方々、おめでとうございます。

芦原義信賞；吉村行雄氏 (4 回生)

「アスブルンドに関する出版・講演・展覧会活動」

竹山実賞；河野有悟氏 (28 回生) 「BRACKET HOUSE かっこのついた『棲まい』」

日月会建築賞 (建築学科三年生対象)

太陽賞；滝川寛明さん・阿部妙子さん・田辺愛さん

満月賞；玉木真さん

三日月賞；井上裕依子さん

新月賞；入江剛史さん

建築学科研究室では、今年度も「芦原義信賞」「竹山実賞」候補の作品を募っています。竹山賞は日月会会員による建築作品であれば、実施された作品でもコンペやプロポザル、計画案でもかまいません。国内・海外も問いません。締め切りは、2008 年 1 月 7 日です。建築学科のホームページ (<http://www.arc.musabi.ac.jp/>) で詳細を確認いただき、書式をダウンロードして応募下さい。より多くの会員の参加をお待ちしております。

が多く実体験したり考えたりしているものもあるかもしれない。建築というのは、単純に技術的に建物を建てていとかデザインするとかいうだけじゃなく、そこに生活とか、おかげさには人生があるわけです。その反映としての建築があるわけです。だから建築を学んだり考える上で人それぞれの人格が反映されるということは、僕であっても、学生としてここに来た人たちであっても、ベースはみんな同じです。だから、昔はどうで今はどうだという比較論には僕はあまり興味がなくて、「僕だったらどうする、あなただったらどうする？」という問いかけとリアクションこそが、ここにいる価値だと思います。物を創って行くという点では、基本的にみんな対等なのです。とても印象深く記憶に残っているのが、織本先生が卒業の際に、「君たちは今、僕らと対等なのだ」とおっしゃったことです。そのひとは今でも忘れられない。僕らは皆、先生から何かひとことぐらい影響を受けていて、それが自分の中に残り、吸収されています。そういうひとことが教育の原

点というところがある。確かに表現をするとか、図面を書くとかを学ぶ必要はありますが、そのひとことの方に影響を受けるところも大きいのではないかと思います。先生たちはきっと、「憶えておけよ」なんていうつもりで言うのではなく、素直に伝えたい事を言葉にして発しているだけですが、学生たちそれぞれが何かに気づき、お互い感動し合うことがあるのだらうと思います。

最後に、学生たちに対して望むことはありませんか？

宮下：自分の枠を決めず、いろんなことにチャレンジしてほしい。「建築」という枠内に制限せず、様々な表現や思想を吸収して見てほしい。何もしないでただ考えているよりも、アクションを起こして失敗しても、それを次の経験に活かす方がいい。これからますます、ある種の垣根というかボーダーがなくなっていくわけです。あともうひとつは、うちの建築学科を卒業するというのも大事だけでも、この大学全体の教育というものが、学科を支える大きな柱なのです。我々としては美術大学としての教育について、いろいろな視点から考えていかななくてはなりません。美術大学で学んだという様々な経験が、武蔵美の学生たちが社会に出たときの大事な財産であり、宝となるのです。

2007 年 6 月 28 日

武蔵野美術大学 8 号館の研究室にて
インタビュー：坂本和子、青山恭之



「武蔵野美術大学 13 号館」 設計：宮下勇
(写真提供：青山恭之)



建築祭・竹山賞授与 新宿サテライトにて
(写真提供：青山恭之)

出会い／建築／アスブルンド

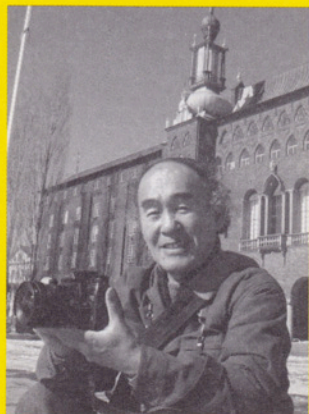
吉村 行雄 YOSHIMURA, Yukio
4回生

サラリーマンとクリエイター

私は、武蔵美の多くの卒業生たちと違い、サラリーマンとして生きてきました。それが自分にとってどういうことだったのか、というあたりから綴ってみたいと思います。

武蔵美流の独立独歩の行き方ではなく、組織の中で自分のやりたいことを見つけていこうと、卒業後、竹中工務店に入りました。もちろん設計をやりたくて入った訳ですが、大会社では、自分のやりたいことをやることが、なかなか大変だということがだんだん見えてきます。

そんな中で、他の人と違ったことが自分ができるということを示すのが大事だと考えるようになり、学生時代からやっていた写真を自分の特技として生かすようになっていきました。コンペや、企業案内などの場で、写真・映像ずいぶんまかされるようになっていき、そのうちに広報部に移れと声がかかりました。自分としては設計がやりたくて入った会社なので、一年という期限付きで広報の仕事に専念しました。その後設計部に戻り、十数年の間に、大から小まで、様々な建物の設



ストックホルム
市庁舎前にて

写真提供：
吉村 行雄

計にかかりました。ひととおりのやっとなと感じていた頃、広報部にと再度声がかかりました。「竹中では、君に代わる人間がないから」と説得されてしまいました。

一万人もいる会社のなかで、自分にしかない仕事があり、それに専念するのいいのではないかと、考えるようになったのです。ナンバーワンよりオンリーワンという歌がありますが、自分はこっちのほうだと。自分ひとりにまかされ、自分で判断しなければならぬ。すると、おのずと大物を相手にしなければならなくなってきます。「アプローチ」という社内報のアートディレクションを長年やっていた田中一光氏や、写真家の石本泰博氏、そして彼らから広がっていく人々。そういった一流の方々と打ち合わせをし、仕事を進めていくのは楽しく刺激的でした。

私のサラリーマン人生35年のうち、前半の設計と後半の広報が、ちょうど半々だったこととなります。このバランスが自分にとってはよかったと思っています。好きなことを仕事にできたというのは幸せでしたし、さらに組織にいたからこそ学べたことも多くありました。仕事は人間関係のなかで動いていきますから、人を見る見方、接し方、いわゆる処世術とも言える諸々を、肌で学びました。

仕事の決定権を持っている事務系のひとたちに、「もの」のよさを翻訳するような立場でも仕事をしてきました。このことは、特に武蔵美の人に伝えるのかもしれませんが、「もの」をつくるのには、そのあたりの社会性も大事だと思っています。

職人と芸術家。この二つは重なる部分もありますが、やはり分けて考えたい。作家・クリエイターとして仕事をしていく時、自分はどこにポジショニングをしていくのか。私は、職人でありたいと思っています。技術屋であり創造者であること (Art & Technology)。人間としての常識の上に立って、技術に裏打



森の火葬場（設計：E.G.アスブルンド）

写真提供：吉村行雄

ちされたいい仕事をしていきたいと考えているのです。

人との出会いの大切さ

組織のなかで仕事をしながら、「一期一会」、「礼を尽くす」といった、人との出会いの大切さを学んできましたが、さらにその大切さを痛感することになるのが、海外での仕事でした。私が北欧に感心を持ったきっかけは、高校時代、大阪の百貨店で開かれた北欧のデザイン展でした。そこで展開されていた、簡素で人間的で、でも飽きがこないような清らかな世界。展覧会の図録を、毎日食い入るようにながめていたものです。大学時代の、芦原先生からの影響もありました。

北欧へ、私の背中を押してくれたキーマンは、竹中に同期で入社した男でした。大会社のなかで別々の生き方をしていましたが、ある日バッテリー再会し、ちょっと北欧への興味を示すと、彼の叔母がスウェーデンにいたので紹介してくれると言うのです。そこから、人と人とのぎずながみるみる広がり、大きな輪を描くまでになったのです。

その輪の中から、「ストックホルムの近代建築」という私の写真展が現地で実現しました。すると、そのオープニングにアスブルンドの息子さん夫妻が来てくださり、アスブルンド財団とおつきあいが始まることになり



米日中のアスブルンドファミリーと私の家族

写真提供：吉村行雄

ました。大規模なアスブルンド展を、海外で初めて東京で開けたのも、そういった人のつながりのなせる業だったと思っています。

「継続は力なり」

私の座右の銘です。ものを造るとき、じっくりと取り組んで、長く続けること。私の写真は小学4・5年生のころからですが、うまく撮れないことが何度もありました。でもそこであきらめずに、もうちょっとやってみる。すると、少しだけ違うものが見えてくる。ずっとその繰り返しだったし、それは今でも続いています。やり始めてつまづいて、そこで止めてしまわない。やり始めたということは、自分にとってそれがプラスになると感じていたはずなのですから。

続けるためには、情熱を絶やさないことです。クリエイティブなものに向かうという、火を消してしまっはいけません。

感動できる事の素晴らしさ

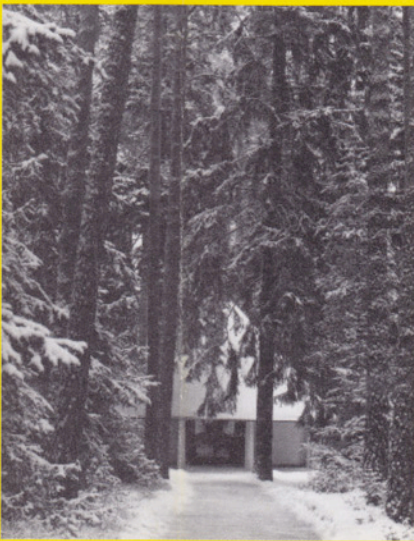
よく、シャッターを切るきっかけは何かと問われますが、私は、「きっかけは感動」と答えています。自分が感動しないで、人に感動を伝えることはできません。感動ができるという自分の感性を磨き続けたい。

五感が磨かれた上に、第六感が生まれてくるとも考えています。武蔵美はどうしても視覚重視になりますが、聴覚や触覚、他の感覚

も総動員して感動を受け止め、クリエイティブしていくことが大事でしょう。

そういった意味では、アスブルンドは、感覚的なものの大切さをつねに考えていた建築家でした。アアルトも彼を評して、「だれも成しえなかった方法で、近代建築を実現した」という言葉を残しています。いかに、使う人の感覚に訴えるのかを深く考えていたので。そのあたりが、私がアスブルンドに惚れこんだツボです。

そんなアスブルンドの建築を訪ねて、この夏、武蔵野美術大学校友会の主催で、8日間のツアーが行われました。宮下教授にもご参加いただき、天気にも恵まれて、大変たのしい旅でした。新たな感動に出会い、帰ってきたところ。またこの先、アスブルンド展のサポロ巡回や、年明けには個展も予定されています。アスブルンドの建築が、クリエイティブということを考えるひとつのきっかけになってくれればと思い、これからも活動が続けていきたいと思ってやみません。



森の礼拝堂（設計：E.G. アスブルンド）

写真提供：吉村行雄

同級生の眼

諸井 徹 MOROI, Tooru

4回生 バレスホテル プロジェクト室

学生時代、彼との出会いは衝撃的でした。なんて頭が良いやつだ。何か一緒にできることがあるだろうか、など勝手なことを思いつつ、何かにつけて話をもちかけたりしてみました。その時彼は、私の思惑など何も知らなかったと思います。彼が、写真についてかなりの知識があり、そのころ少し写真に興味を持ち、自宅暗室で現像、引き伸ばしなどを始めた自分にとっては、いろいろ教えてもらえる可能性がありました。

しかし、とうとう彼と何かをした、ということがないまま、卒業を迎えることになってしまったような気がします。卒論、卒業制作の準備で、皆と会う機会も少なくなかった頃、彼の就職が、竹中工務店に決まったようだ、と聞き、アトリエ事務所に行くものと勝手に思い込んでいた私は意外に感じたものでした。

後に、設計部から広報に変わり、異例とも思える長期間にわたって広報の業務を続けられたことも聞きました。趣味の写真が、本業にもつながり、ライフワークとなった、北欧の巨匠E. G. アスブルンドとの出会いにもつながったように思います。

集大成の出版記念のパーティーに出席した折、久しぶりに再開しました。多くの人たちに支えられて、また、多くの人との出会いがあって、素晴らしい作品集ができたことは、彼の手柄からだと思っております。写真家として独立し、これからも多くの建築写真を撮り続け、年始の手作りカレンダーが届くことを楽しみにできるようにして下さい。

TDU + MAU ワークショップ

市堰 祐輔 ICHISEKI, Yusuke
大学院1年生 高橋スタジオ

オランダのデルフト工科大学 (TDU) から初めてのワークショップの知らせが高橋先生の元にやってきて、やるかやらないかを院生に聞かれた時、正直迷いながら志願しました。最初は「デルフト工科大学の学生とワークショップ」と言われてもピンと来なかったのですが、デルフトの卒業生の名前等を聞いて、調べていくうちに興味がわいてやってみたく感じるようになりました。言葉の壁もある上、初めに何についてデルフト側にプレゼンするのが好ましいのか、ワークショップとしてどんな内容をデルフト側が希望しているのか等、暗中模索のスタートでした。

普段、課題を行うときは与えられたものをどのようにこなすかが要求されるのに対し、今回は自分たちが課題を作成し、敷地を選定し、期間が2日という短さの中で両校が共同制作するプロジェクトを計画することの難しさを体験しました。敷地調査、現状把握、アポイントメント等、事前の準備にはものすごい体力を使いました。

正直、面倒になったり体調を崩してゼミに出られなかったり等いろんな事がありました。互いの主張を聞いて互いの意見を出し合い、この事を通して武蔵野美術大学の学生として、はじめて一緒に出来た事として嬉しく思っています。

私たちはオランダのデルフト工科大学とワークショップを行うにあたり、まず日本のものを、昔から継承しているものとは何かということを考えました。候補地として、浅草・蔵前・両国・月島・佃島・谷中・神楽坂を挙げ、みんなでリサーチを行いました。震災や戦争により建物は消失していますが、街区や道は

江戸時代から変わっていない地区が多く、更に大きな道から派生した生活に密着している“路地”に日本ならではのコミュニティ、パブリックスペースが見られるのではないかと考えました。結果として、平地なオランダとは対照的で地形に富む事、様々な路地空間がある事から神楽坂をフィールドワークの敷地に決定しました。課題としては、短期間滞在する場を設計するという内容になりました。

ワークショップの流れは、まず1日目は新宿の武蔵野美術大学の新宿サテライトにデルフトの学生を招いて、源先生から日本の建築の工法についてのレクチャーをしていただき、デルフト工科大学からは大学の紹介と、学生の作品のプレゼンテーションをしていただきました。昼はサテライト内でお弁当を食べて、午後はグループに分かれて神楽坂に行き、神楽坂の街のつくりと街並、地形等をリサーチをしました。その後別会場に移動し、リサーチの結果をもとに意見を出し合い、翌日の制作に向けてまとめをしました。2日目は、鷹の台キャンパスで朝から模型やプレゼンテーションパネルの制作作業をし、夕方パーティカルレビューで日本語と英語でプレゼンテーションをしました。その後は、交流を深めるためのパーティーを催しました。時間が限られた中で両校の学生たちが協力し合い、それぞれの作品をやり遂げた事に大きな成果が出来たとおもいます。

今回のワークショップを通して、初めて会うムサビ生、またデルフト工科大学のみなさんとも交流を深めることができました。自分は言葉の壁が一番大きな課題になっていたのですが、それを助けてくれたみなさんに感謝いたします。今回のデルフトとのワークショップはとても短い時間の中で良い作品も出来、プレゼンもよかったですと思います。このような経験はこれから先も沢山やっていると良いと考えています。



パーティカルレビューでのプレゼンテーション
写真提供：坂本和子



ワークショップ参加者集合写真
写真提供：高橋スタジオ

編集後記

◎今回は、宮下先生のインタビューの記事の中で、武蔵美の新しい建物の数々をご紹介しました。建築学科のデルフト工科大学とのワークショップも、新しい試みのひとつでした。最近のキャンパスの様子を感じ取っていただけましたでしょうか？(K.S.)

フォルマ・フォロ
Vol.8 / 2007.12.1

編集：青山恭之、坂本和子
デザインフォーマット：矢萩喜徳郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
<http://www.nichigetsu.org>
東京都小平市小川町 1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内